

各関係機関の長
各病虫害防除員 殿

宮崎県病虫害防除・肥料検査センター所長

平成 2 5 年度病虫害発生予報第 7 号について

平成 2 5 年度病虫害発生予報第 7 号を発表したので送付します。

平成 2 5 年度病虫害発生予報第 7 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

○ 発生予報の概要

作物名	病虫害名	発生量の平年比	記載ページ
施設野菜全般	1 アブラムシ類	並	2
	2 ハスモンヨトウ	やや多	2
	3 タバココナジラミ類 (ハイオタイフ [®] B (シルバーリーフコナジラミ)及びハイオタイフ [®] Q)	やや多	3
冬春きゅうり	1 ベと病	並	3
	2 うどんこ病	並	3
	3 褐斑病	並	3
	4 黄化えそ病	—	4
	5 ミナミキイロアザミウマ ※	やや多	4
冬春ピーマン	1 斑点病	並	4
	2 うどんこ病	並	4
	3 ミナミキイロアザミウマ	並	5
	4 ヒラズハナアザミウマ	—	5
	5 タバココナジラミ類	やや多	5
冬春トマト	1 葉かび病	やや多	5
	2 トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	前年と同程度	5
	3 タバココナジラミ類 ※	やや多	6
冬春いちご	1 うどんこ病	並	6
	2 炭疽病	並	6
	3 ハダニ類	並	6
	4 アブラムシ類	やや多	6
果樹全般	1 果樹カメムシ類	—	7
かんきつ類 (露地栽培)	1 ミカンハダニ	やや多	7
茶	1 カンザワハダニ	やや多	7

※は防除情報を発表中

○ 作物の生育状況 (10月中旬)

冬春きゅうり、冬春ピーマン、冬春トマト、冬春いちごは定植～生育初期、うんしゅうみかんは収穫期、中晩柑(日向夏)は果実肥大期、茶は秋芽生育期でした。

○ 向こう1か月の気象予報

天気は数日の周期で変わり、気温は平年並または高い確率ともに40%、降水量・日照時間は平年並の確率40%と予想されています。(1か月予報 鹿児島地方気象台10

○ 発生予報の根拠および防除対策

施設野菜全般

1 アブラムシ類 (並)

[予報の根拠]

- (1) 黄色水盤での誘殺数(宮崎市佐土原町)は、平年並～やや少なく推移している。
- (2) 10月中旬の巡回調査における冬春いちごでの発生面積率75.0%(平年43.7%)、寄生株率22.7%(平年9.1%)はいずれも平年より多である。
- (3) 冬春きゅうり、冬春ピーマン、冬春トマトでは発生未確認である。

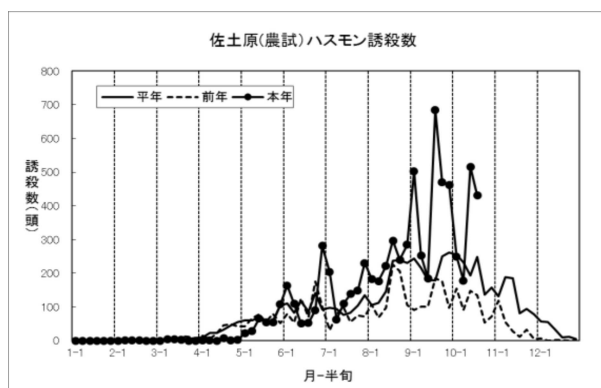
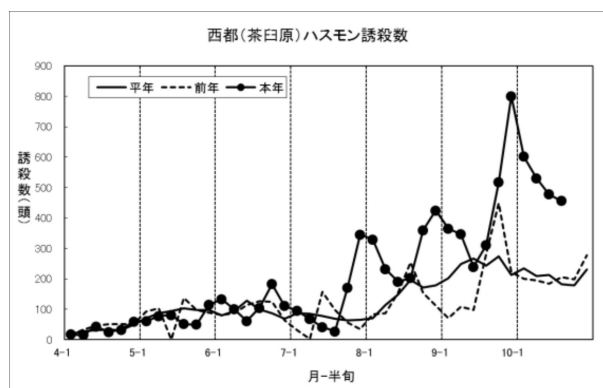
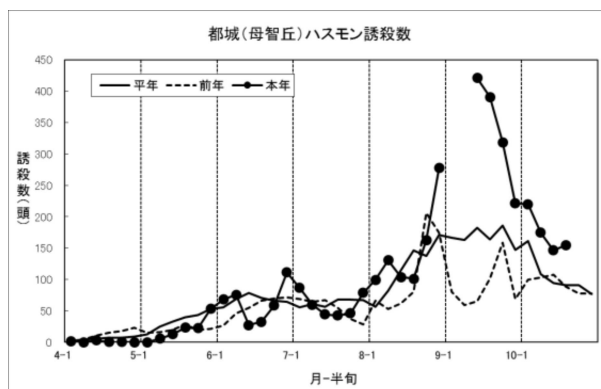
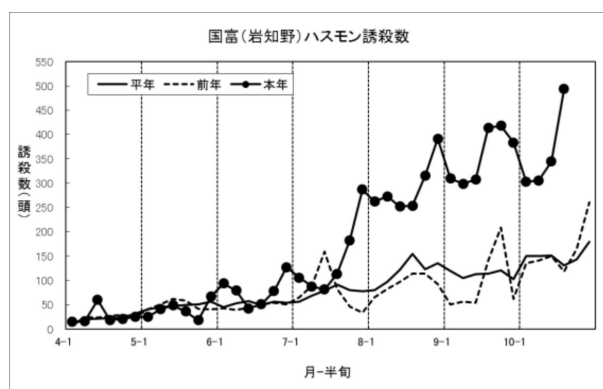
[防除上の注意]

- (1) きゅうりやピーマン等多くの作物にウイルス病を媒介するので、有翅虫の飛来防止に努めるとともに、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を定期的に行う。
- (2) ワタアブラムシのネオニコチノイド系薬剤等に対する感受性低下が一部の地域で確認されているので、使用薬剤については地区の普及指導員や技術員の情報を参考にする。

2 ハスモンヨトウ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査における冬春きゅうりでの発生面積率23.1%(平年34.0%)は平年並、被害葉率0.5%(平年1.0%)は平年よりやや少である。
- (2) 冬春ピーマンでの発生面積率7.7%(平年21.3%)は平年よりやや少、被害株率1.2%(平年0.9%)は平年並である。
- (3) 冬春トマトでの発生面積率50.0%(平年18.6%)は平年よりやや多、被害株率2.4%(平年0.7%)は平年より多である。
- (4) 冬春いちごでの発生面積率41.7%(平年44.0%)、寄生株率3.3%(平年3.0%)はいずれも平年並である。
- (5) フェロモントラップにおける誘殺数は、9月中下旬にピークが見られ、平年より多い傾向で推移している。



[防除上の注意]

- (1) 幼虫が大きくなると薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め若令幼虫期に防除する。

3 タバココナジラミ類 (ハ・イタイブ[®]B(シムハ[®]-リコナジラミ)及びハ・イタイブ[®]Q) (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査における冬春きゅうりでの発生面積率84.7% (平年67.3%) は平年並、100葉当たり虫数11.5頭 (平年8.0頭) は平年よりやや多である。
- (2) 冬春ピーマンでの発生面積率69.3% (平年48.9%)、100葉当たり虫数24.8頭 (平年4.4頭) はいずれも平年より多である。
- (3) 冬春トマトでの発生面積率87.5% (平年47.2%)、100葉当たり虫数5.0頭 (平年2.3頭) はいずれも平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 施設開口部には必ず防虫ネットを設置して、施設内への侵入を防止する。設置する防虫ネットは、目合い0.4mm以下のものが有効である。
- (2) 施設内には黄色粘着板等を設置し、早期発見に努めるとともに本虫の密度を抑制する。
- (3) 多発してからでは防除が難しくなるので、発生を確認したら早めに防除する。なお、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- (4) 施設内外の雑草は、タバココナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。

冬春きゅうり

1 ベと病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査では、13ほ場のうち1ほ場で微発生^(注)(発病葉率0.5%未満)を確認しており、発生面積率0.0% (平年7.2%) 及び発病葉率0.0% (平年0.8%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 湿度が高いときに発生しやすく、激発すると防除が困難となるので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。
- (2) 窒素切れや草勢の衰えは、発生を助長するので適正な肥培管理に努める。

2 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査では、発生面積率30.8% (平年22.5%) 及び発病葉率2.5% (平年1.5%) はいずれも平年よりやや多である。
- (2) 苗からの持ち込みにより、ほ場における本病の発生が確認されている。

[防除上の注意]

- (1) 病勢が進展してからでは防除効果が低くなるので、発病を確認したら早めに防除する。
- (2) 耐性菌を生じやすいので、同一系統薬剤の連続散布を避ける。
- (3) 乾燥時に多発するので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

3 褐斑病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査では、13ほ場のうち1ほ場で微発生^(注)(発病葉率0.5%未満)を確認しており、発生面積率0.0% (平年7.2%) 及び発病葉率0.0% (平年0.8%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 多発してからの防除は困難なので、初期防除を徹底する。
- (2) 窒素質肥料の多用は発病を助長するが、逆に少ないと草勢の低下を招くので、適正な肥培管理に努める。
- (3) 摘除した罹病葉は、ほ場外に持ち出し処分する。
- (4) ベと病やうどんこ病の発生後に激発することがあるので、本病以外の病害の発生に注意する。

4 黄化えそ病 (MYSV)

[防除上の注意]

- (1) 今年は露地キュウリにおけるキュウリ黄化えそ病(MYSV)発生が多く確認されている。今後施設栽培への伝搬やウリ科作物への感染の拡大が懸念される。
- (2) 本病はミナミキイロアザミウマによって永続的に伝搬されるため、発生後は急激にはほ場内外に蔓延する恐れがある。ミナミキイロアザミウマの防除対策については、次項を参照のこと。
- (3) 感染株を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ほ場外に持ち出し埋却処分するか、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理する。
- (4) 本病と疑われる症状が発生した場合は、西臼杵支庁・農林振興局（農業改良普及センター）または病害虫防除・肥料検査センターまで連絡する。

5 ミナミキイロアザミウマ (やや多)

※平成25年度病害虫防除情報第11号(10月24日発表)参照

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査では、発生面積率30.8%(平年15.4%)は平年よりやや多、100葉当たり虫数5.6頭(平年0.9頭)は平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 最近、本虫の各種薬剤に対する感受性低下が顕著となっており、多発してからは防除が難しくなるので、低密度のうちに防除する。
- (2) 本虫の施設への侵入を防ぐため、開口部に目合い0.4mm以下の防虫ネットを必ず設置するとともに、近紫外線カットフィルム等の物理的防除手段を利用する。
- (3) 本虫の土中や地表面での蛹化を防止するためのマルチ被覆や誘殺のための有色粘着板の設置等、総合的な防除対策を講じる。

冬春ピーマン

1 斑点病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査では発生未確認であり、発生面積率0.0%(平年1.4%)及び発病葉率0.0%(平年0.1%)はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件で発生しやすいので、除湿に努める。
- (2) 病原菌が侵入した後の防除効果は低いので、予防散布を行う。

2 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査では発生未確認であり、発生面積率0.0%(平年4.7%)及び発病葉率0.0%(平年0.1%)はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。
- (2) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので、早期発見に努め、発病を確認した

ら早めに防除する。

3 ミナミキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の花での見取り調査における発生面積率23.1%(平成25.9%)は平成並、10花当り寄生虫数0.2頭(平成0.6頭)は平成よりやや少である。

[防除上の注意]

- (1) ミナミキイロアザミウマの成虫が10花当り1頭程度寄生すると、販売等級格下げとなる果実が5%発生するので、発見したら早めに防除する。
(2) 開口部への防虫ネットの設置や、マルチ被覆、誘殺のための有色粘着板の設置により、生息密度の抑制に努める。

4 ヒラズハナアザミウマ

[防除上の注意]

- (1) ヒラズハナアザミウマは主に花に寄生し、果実へタ部表面の褐変や白ぶくれ症状の被害につながる。定植時に粒剤処理を行い初期密度を抑制する。
(2) 本虫の施設への侵入を防ぐため、開口部に防虫ネットを設置するとともに誘殺のための青色粘着板を設置し、密度の抑制に努める。
(3) ヒラズハナアザミウマに効果のある薬剤は、ピーマンで使用される天敵への影響が大きいため、天敵を放飼する場合は放飼前に十分に防除を行い、影響日数が経過した後に天敵の放飼を行う。
(4) 圃場内外の除草を徹底する。

5 タバココナジラミ類 (ハ・イタワ・B(シハ・リー・フナジ・ラミ)及びハ・イタワ・Q) (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の発生面積率69.3%(平成48.9%)及び100葉当り虫数24.8頭(平成4.4頭)はいずれも平成より多である。

[防除上の注意]

施設野菜全般のタバココナジラミ類(3ページ)を参照のこと。

冬春トマト

1 葉かび病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査では、発生面積率12.5%(平成1.4%)及び発病葉率0.1%(平成0.01%)はいずれも平成より多である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿条件や肥料切れで発生しやすいので、ハウスの換気を良好にするとともに草勢維持に努める。
(2) 発病初期の防除を徹底する。

2 トマト黄化葉巻病 (TYLCV) (前年と同程度)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査では、発生未確認であるが、生産者からの聞き取りによると3圃場で発生している。

発生面積率0.0%(H24:0.0%、H23:44.4%)及び発病葉率0.0%(H24:0.01%、H22:0.22%)はいずれも前年と同程度。

[防除上の注意]

- (1) 本病は、タバココナジラミ類により媒介され、生育初期に感染すると被害が激し

く収穫皆無となる場合もあるので、発病株はすぐに抜き取り、速やかに埋却等適正に処理する。

3 タバココナジラミ類（ハイトイフ[®]B(シム[®]-リ-フコジ[®]ラミ)及びハイトイフ[®]Q) (やや多)

※平成25年度病害虫防除情報第12号(10月24日発表)参照

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の発生面積率87.5% (平年47.2%) 及び100葉当たり虫数5.0頭 (平年2.3頭) はいずれも平年より多である。

[防除上の注意]

施設野菜全般のタバココナジラミ類 (3ページ) を参照のこと。

冬春いちご

1 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査における発生面積率16.6% (平年20.4%) 及び発病葉率2.9% (平年3.3%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 発生初期は葉裏に発生しやすいので、早期発見に努め初期防除を徹底する。
(2) 激しく発病すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。
(3) 発病果など被害部は、伝染源になるので早めに取り除き、ほ場内に放置しない。

2 炭疽病 (並)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の発生面積率8.3% (平年13.2%)、発病株率0.3% (平年1.4%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 多湿にならないよう、ほ場の排水対策を十分行う。
(2) 定植後に発病した株は、早期に除去し新たな感染を防止する。
(3) 親株床の発病残さは翌年の伝染源になるので、ほ場外に持ち出し適正に処分する。

3 ハダニ類 (並)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の発生面積率25.0% (平年31.3%)、寄生株率0.8% (平年6.2%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 寄生数が増加してからの防除は困難なので、密度が低い時点からの防除を徹底する。
(2) ミツバチに影響のある農薬があるため、ミツバチを入れる前に防除の徹底を図るとともに使用する農薬の選定に留意する。
(3) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。
(4) ダニ剤散布時は、葉裏に良くかかるようにていねいに散布する。
(5) 薬剤感受性の低下が確認されている地域があるため、系統の異なる農薬をローテーションで使用する。

4 アブラムシ類 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の発生面積率75.0% (平年43.7%)、寄生株率22.7% (平年9.1%) はいずれも平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 寄生数が増加してからの防除は困難なので、密度が低い時点からの防除を徹底す

る。

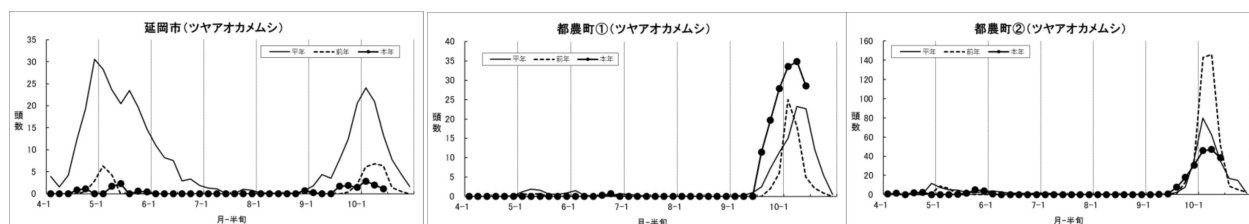
- (2) ミツバチに影響のある農薬があるため、ミツバチを入れる前に防除の徹底を図るとともに使用する農薬に留意する。

果樹全般

1 果樹カメムシ類

[防除上の注意]

- (1) 予察灯のツヤアオカメムシの誘殺数はおおむね平年並で推移しているが、地域によっては9月下旬頃から急増している。県内3か所に設置しているフェロモントラップの誘殺数についても地域によっては9月中旬頃から平年よりやや多で推移しているため注意が必要である。(下図)
- (2) チャバネアオカメムシの誘殺数は、予察灯で平年並、フェロモントラップでは平年並からやや少ない状況で推移している。
- (3) 西日本での果樹カメムシ類の発生がやや多く、九州では福岡県が注意報を発表している。
- (4) 果樹カメムシ類は園外から飛来し、地域や時期によって発生量が大きく変動するので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努める。
- (5) うんしゅうみかんでは、色ぬけから着色始め頃の加害は落果を生じやすく、特に注意が必要である。



かんきつ類 (露地栽培)

1 ミカンハダニ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査における発生面積率27.9% (平年39.1%)は平年よりやや少、寄生葉率11.6% (平年5.9%)は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 生息密度が高くなると防除効果が劣るので、寄生葉率30%または1葉当たり虫数0.5~1頭を目安に、発生初期に防除を行う。
- (2) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一系統薬剤の連用を避ける。

茶

1 カンザワハダニ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 10月中旬の巡回調査における発生面積率29.4% (平年35.4%)は平年並、寄生葉率3.9% (平年2.9%)は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は越冬前の10月中下旬であるが、気象要因による変化が大きいため、茶園を観察して防除の必要性および時期を判断する。

- (2) 赤焼病の発生が懸念される茶園では、11月～12月中旬のマシン油乳剤の使用は発生を助長する恐れがあるので、防霜対策終了後に散布し発病を抑制する。
- (3) 本県では冬期においてもダニの繁殖が見られるため、越冬前の防除がより重要であり、この時期の防除が十分でない翌年の一番茶への影響が大きい。
- (4) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を実施する。

(注) 微発生とは、生息が確認されるが発生面積として換算する基準値に達しない密度の発生状況をいう。

○ その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

宮崎県農薬安全使用啓発ホームページ

<http://nouyaku-tekisei.pref.miyazaki.lg.jp/nouyaku/user/top/miyazaki>

日本植物防疫協会

<http://www.jpnpn.ne.jp>

農林水産省(農薬コーナー)

<http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

農林水産消費安全技術センター

<http://www.acis.famic.go.jp/>

- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに被害の発生防止に努める。

- 3 発生量(程度)の区分

多い	(高い)	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い	(やや高い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並		平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない	(やや低い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
少ない	(低い)	やや少ないの外側10%の度数の入る幅 (平年値は過去10年間の平均)

- 4 予察情報の種類

病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

- (1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
- (2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- (3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- (4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
- (5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

○ お知らせ

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。

ホームページアドレスは、<http://www.jpnpn.ne.jp/miyazaki/>です。

【文書取扱】

病虫害防除・肥料検査センター 倉富

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-2127

E-mail: byogaichu-hiryo

@pref.miyazaki.lg.jp